

粹を愉しむ

- 手間をcoolに

変化の起点となる芥箱 -



- Concept -

靴を脱ぐ・敷居をまたぐなど、一見煩わしい和の文化。
しかし、その煩わしさこそが和の特徴であり、日本では古くから「粹」と呼ばれ愉しまれてきた。
このプロダクトは、粹を体験し和への敷居を下げる足がかりとなる。

■手間を粹と捉える和の文化

和の文化には暗黙の了解が多いように感じる。
何故だろうか。そこには日本古来からの明確化しないことへの美意識が存在するからではないか。
この美意識は「粹」と呼ばれ、人々はルールに従うのではなく、誰かへの思いを原動力に手間をかけることを愉しんできた。

和の文化



これより我々は「粹愉 (スイユ)」という上位概念手法を提案する。

■提案 - 粹愉 -

日々の行動にまつわるプロダクトに「粹愉」という手法を取り入れ

粹な行動を愉しむことで和を身近に日常を豊かにする。



■例えば... 分別

粹を誰かを思った手間であるとするなら
ペットボトルを捨てる際の分別もそうではないか。
小さければゴミを収集する際の、
大きければ100年以上の地球への「粹」な行為である。



(Where) 京都にあるバス停で (When) バスを待つ
(Who) 外国人観光客に
(What) ペットボトルを (How) 分別することで
(Why) 粹を体感してもらう

